

## アンコール・ワットの世界史的意義

重 藤 威 夫

- 一 世界文化発展史上におけるアンコール・ワット
- 二 アンコール・ワットとバガヴァード・ギータ
- 三 中国宗教史における廃仏毀釈運動
- 四 アンコール・ワットと日本人

### 一 世界文化発展史上におけるアンコール・ワット

人類文化の大きな流れを見るとき、そこに洋の東西にわたって、一つの大きな躍動の時代が見られる。或は一つの時代的区分がなされ得るといってもよいであろう。西紀前750年頃から350年頃までの400年間を、イスラエルでは、予言者の時代と呼ばれるが、イスラエルの信仰史上、不朽の黄金時代を現出した時代である。この時代は、ひとりイスラエルに限らず、全人類の文化史の中で、最も創造的な又画期的な偉大な時代であった。

イスラエルでは、アモス、ホセア、イザヤ（B・C 740—696 ころ活躍）、エレミヤ（B・C 650 ころ出生）等多くの予言者達が輩出してイスラエルの宗教史における旧約聖書の時代が創建された。中国に孔子（B・C 479 没）、インドに釈迦（B・C 477 入滅）、ペルシアにゾロアスター（B・C 660—583）が生れて、儒教、仏教、拝火教が創始された。またギリシアでは、ソクラテス（B・C 470—399）から、その弟子、プラトン、アリストテレスによって大成されたギリシア哲学の基礎が、その間にすえられた。いはばこの時代は、人類の宗教、思想、哲学等の精神文化の胎動期或は揺らん期であった。神よりの真理が、人類に予言者達を通じて、始めて啓示された時代であった。こゝにいう真理の意味は次のように考えられる。それは各宗教或は哲学によって、それらの世界観の相違により、その間にかなりの相違があることは当然であるが、大体において、次のように解釈して大なる誤はないであろう。先づ第一に、それは宇宙の創造主としての神と被造物たる人類との間の正しい関係を意味する。第二に、それは人と人との間の社会関係を律する規範を意味する。人間の社会生活は、単なる動物的な共同本能によるものではなく、自由人格としての人間が、相寄り相扶け合いつゝ、また互に自他の人格を敬重し合いつゝ生きている社会である。従って、そこには人間対人間の生活関係を律すべき古今東西にわたって普遍妥当的な規範が要求されることは当然である。この規範は、我国では昔から、正義、道理、道等の言葉で表現されて来た。ギリシアでは、Logos, Idea の名で呼ばれて来た。

かくの如く地球上の各方面に、略々同時代に、多数の予言者や世界的宗教の創始者達が出現したことは、単なる偶然の集合ではなくして、そこに神意のはたらきがあることを考

えざるを得ない。かゝる考え方は、勿論、キリスト教的歴史観に基いている。キリスト教的歴史観では、宇宙の創造主であり、また唯一神である全能の神が全宇宙を支配すると考える。全宇宙は神の予定計画に基いて運行される。人間社会の歴史も、人間には不可知的な神意によって進行する。しかもその進行の間には、ヘーゲルの歴史哲学に表現されているような「世界歴史は世界審判なり」(Weltgeschichte ist Weltgerichte)なりという神のきびしい裁きが行われる。「世界審判なり」という以上、そこには審判者としての神の存在が根本的な前提となっている。また審判する以上、そこには審判の標準が存在しなければならない。その標準(真理)は、キリスト教では旧約聖書と新約聖書の中に啓示されている。国家なり或は個人なりが、その真理に背く場合には、神からきびしく罰せられ、真理に従う場合には、限りなき恩寵が与えられる。以上がキリスト教的歴史観の概要であるが、その他、それぞれ世界観の相違によって、多数の歴史観が存在しうことは明かである。例えば、唯物史観(Die materialistische Geschichtsauffassung)では、超越的な創造神は勿論、すべての神の存在は全く否定され、世界の歴史は下部構造(Unterbau)としての生産力関係の変動によって、進展して行くと考え。今こゝで、各種の歴史観の妥当性について論ずることは本論文の目的とするところではないので、一応、前記のキリスト教的歴史観を基礎として、論を進めて行く外はない。

右の時代を世界文化史の中で「啓示の時代」(age of revelations, Offenbarungszeit, L' âgedes révélations)と名づけることができるであろう。この時代に啓示され、種子をまかれた真理は、その後、次第に土中深く根を張り、時の経過と共に発展して行き、8世紀から14、15世紀頃にかけて、亭々として天を摩す大樹となり、美しき宗教文化の花を地球上の各地に咲かせるようになった。いはば、この時代は「開花の時代」(age of blooming, Zeit des Blumenflores, L' âge de la floraison)と呼ぶべきであろう。歐洲の各地において、8世紀から14、15世紀頃にかけて完成された壮大なゴシック式の大伽藍は、その代表的なものである。

ゴシック式の大伽藍は、歐洲の各地に散在するが、それらの中で最も著名であり、かつ代表的なものとしては次のものがある。ルネッサンス文化の中心地として、その時代に繁栄したフィレンツェにある「花の聖母寺」(Santa maria dei Fiori, Santa maria del Fiore, Duomo)と称される白と紅の大理石で造られた荘麗な大伽藍がある。1294年から建築に着手され、1462年に大体完成されたが、現在見られるような正面(facade)ができ上ったのは1887年である。ミラノのそれは、すべて白色の大理石で建てられ、その高さは48米あって、ゴシック式建築<sup>(1)</sup>としてはイタリアで最大の建造物である。現在は時代の経過と共に風化作用をうけ、下半分はくろずんでいるが、上半部は白色のまゝで甚だ美麗であって、この点ではフィレンツェの大伽藍よりは、はるかに優っている。建築年代は1385年から1418年にいたる。<sup>(2)</sup>ドイツではライン河畔に聳え立つケルンの大ドウムがある。第二次大戦中、連合軍の爆撃のため、ケルン市は市中の大半にわたって大破壊をうけたが、この

ドゥモは、奇蹟的に破壊を免かれ、今もなお中世以来の美しい姿を見せている。これは1270年に建築に着手され、choir（内陣）は1322年に完成された。建築の残の部分、最初の計画に従って完成されたのは、19世紀に入ってからである。パリのノートル・ダム寺院（La Cathédrale Notre Dame de Paris）が建築に着手<sup>(3)</sup>されたのは、1163年であるが、正面（facade）にある二つの高塔は、1190年から1250年にかけて建築され、かくて全体としての完成を見た。最初の計画では、正面の二つの高塔の上に、他のゴシック式建築と同様に、高い尖塔をつくる予定であったが、現在見られるような二高塔だけでも調和を得た、壮重な趣をもつ建築ができたので、それに満足して尖塔の建築は中止された。ノートル・ダムの近くで、やはりシテ（cité）の中にあるサント・シャペル礼拝堂（La Sainte-chapelle）も、パリの代表的なゴシック式建築の一つに数えられる。これは聖王ルイ九世（Saint-Louis IX, 1214—1270）によって、1244年から47年にかけて建築された。聖王ルイが十字軍の遠征の結果、東ローマ皇帝ボドゥアン（Baudouin）から手に入れたキリストの茨の冠の一部や十字架の断片を奉納するために建造した。フランスには右のほか、シャルトル Chartre（1194—1260）、ランス Reims（1210—1311）<sup>(5)</sup>、アミアン Amien（1220—1269）等その外いたるところに、国土の美、国民の美的感覚の鋭敏性、古来から伝統的な建築技術の優秀性等を反映して、美しいゴシック式の建築が見られる。（右の括弧内の数字は、それぞれ建築年代を示す。）

英国には、カンタベリー大寺院（Canterbury Cathedral）がある。これは英国の中世史とは密接不可分の関係にある。中世時代、現在の総理大臣に相当する役職の政治家は、カンタベリーの大司教（archibishop）から、国王によって選ばれることが多かったために、政治的に結びついているだけでなく、チョーサー（Chaucer, 1340—1400）のカンタベリー物語（Canterbury Tales）に見られるように、当時の国民全体の信仰生活の中心的地位を占めていた。また歴代の国王の戴冠式で有名なウエストミンスター寺院（Westminster Abbey）がある。これはエドワードぎんげ王（Edward the Confessor 1042—1066）によって、1065年に創建された。更に1245年にヘンリー八世（1216—1272）によって、現在見られるような壮麗な様式に寺院全体が再建された。

インドシナのアムコール・ワット、中国の大同の雲崗及び洛陽の龍門の二大石仏、我国の奈良朝、平安朝時代の仏教建築等は右のゴシック式建築と略々同時代に咲き出た花であり、人類文化史上、不朽の大遺蹟である。インドシナのアムコール・ワット及びバイヨン<sup>(6)</sup>は、12世紀前半から、13世紀初にかけて建設された。我国の奈良・平安朝時代の仏教建築は、8世紀始から、12世紀始にかけて建築された。中国の二大石仏は、5世紀頃のものであって、他に比べて時代的なずれが見られる。ゴシック式建築等より、かなり時代が早い、これは中国の文化史上の特殊事情に基くものであって、別に項目を設けて説明する必要がある。

## 二 アンコール・ワットとバガヴァード・ギータ

アンコール・ワットは、クメール語で「寺の都」の意味である。Angkor は王都を意味し、Uat は寺を意味する。これは寺院建築を中心とするものであるが、単にそれだけのものではなく、王城や、演武場、各種の塔廻廊等を含む壮大な中世都市の遺蹟であると言った方が適当であろう。殆んどすべて砂岩からつくられているが、所々ラテライト（鉄ばん土）を使ったところもある。すべて壁面には、美麗で、緻密な彫刻が施されている。その彫刻の主題は、マハーバラタ（印度教の経典）に関するものであり、仏教の影響も仏像等に或程度認められる。アンコール・ワットの建設者であるクメール民族が、最も繁栄した8世紀から12世紀までの間に建築されたものである。アンコール・ワットに隣接して、バイヨンがある。通常、アンコール・ワットと言われる場合には、バイヨンも含まれているが、バイヨンは建設年代が少し新しく、12世紀末から13世紀初にかけてつくられた。その当時は、金、銀、朱で彩り、此世のものとも思われぬような地上における美麗な祇園精舎を現出していたそうであるが、今は金、銀の装飾は全く失われ、朱も壁面の彫刻のわずか1ヶ所に朱の彩りを残しているにすぎない。その規模の壮大、建築様式や彫刻の美麗さにおいて、世界史的意義を有するものと言いうる。

かゝる大きな文化史上の遺蹟がつくられる基礎には、洋の東西を問わず、必ず人間の大きな精神的躍動の時代があり、敬虔な宗教意識高揚の時代がある。その宗教は戦後我国に汨濫している各種の新興宗教の類とは全く異ところの 世界史的に重要な意義がある真正な宗教であり、啓示宗教である。こゝにいう宗教とは、世界史的に見て重要な文化の創造力の源泉となりうる宗教である。戦後我国に多数発生した新興宗教の中には、いかゞわしい動機ではじめられたものもあり、その教義や教団の内容からみて、世界史的宗教、即ちドイツの学者の称する「世界宗教」(Weltreligionen)に価するものが存在するや否や、大いに疑問である。

アンコール・ワットを創造せしむるだけの力をクメール民族に与えた精神史的基礎をなすものが何であるかについては、久しく疑問としていたところであった。それがマハーバラタであることは明かであるが、数年前にマハーバラタの重要な内容の一部をなすバガヴァード・ギータ (Bhagavad Gita) についての邦語訳が我国で始めて完成されたので、それを一読する機会を得て、長年の疑問が氷解した。<sup>(7)</sup> バガヴァード・ギータは偉大な啓示の書である。聖書や大蔵經の邦語訳と相並んで、もっと早くから我国に紹介され、読まべき書である。

これは2世紀頃、インドで編集されたものであるが、内容はヨハネ伝によく似ている。当時、すでにインドにはキリスト教徒が居ったので、ヨハネ伝の思想を攝取した1インド人が、インド教的形式にこれを書き改めたものであろうといわれる。マハーバラタは表面的には、インドの戦争叙事詩であって、好戦的な戦争詩と誤られやすいが、その中のバ

ガヴァード・ギータで語られている思想は、絶対非戦思想であり、平和思想である。「ガンジーは、若き日にこれを貪り読んだ。彼の偉大な人格を培う根源は、こゝにあったと言ってよい。……彼のみでない。彼につづく今のネールその他の全インドの指導者たちにとって、もっとも大きい靈感の泉は、たゞこの一書に求められているといっても過言でないだろう。またサンダー・シングやその母が、いかにこれを愛読したかは、吾人のよく知るところである。」

(8)  
往昔、クメール民族に靈感を与えて、偉大な文化創造力の原動力となったものが、バガヴァード・ギータの精神であろうことは、アンコール・ワットの彫刻などからみて、推論できるところである。この精神は未だほろびず、脈々として伝わり、現代のインドで活々として、その指導者たちを通じて働いている。

### 三 中国宗教史における廃仏毀釈運動

中国文化史において、西洋のゴシック建築文化や我国の奈良朝、平安朝の仏教建築文化等に比肩すべきものが、隋（589—617）・唐（618—905）時代に建設された筈である。隋・唐時代が、中国文化史上において、中国仏教が最も隆盛を極めた時代であり、同時にそれは中国文化史上最盛期であった。我国の奈良・平安朝の文化は、隋・唐文化から専らうけついだもので、いはゞその亜流にすぎなかった。中国文化最盛期の産物としての隋・唐時代の多くの文化財が、世界人類に対する貴重な遺蹟として残されていなければならない筈である。しかるに、それらのものは皆無と言ってよいほど、現在の中国の全土にわたって残されていない。これは世界文化史上から見て甚だ遺憾なことである。わずかに先に述べた大同の雲崗、洛陽の龍門の二大石仏（5世紀頃）が残されているにすぎない。これは時代的に古く、「開花時代」以前のものである。右の西洋や我国の諸文化財とは、時代的なずれがあって、同列に論ずることはできない。その特殊な時代史的意義については後述する。

隋・唐時代の文化財が中国で全く滅亡に帰した事情は、如何なる原因によるものであろうか？これについては、中国における廃仏毀釈運動の歴史を顧みなければならない。この運動は420年から959年にいたるまで、500年以上の期間にわたって、中国でくりかえし4回ほど執拗につづけられたものである。これは中国文化史上、最も注目すべき大事件であると考えられる。これは隋・唐時代に最高潮に達した中国仏教に挫折の運命を与えただけでなく、中国文化全体の盛衰を左右する運命的な大事件であった。

古来、中国精神を支配して来たものは、儒教と道教とであった。中国における仏教は千有余年の歴史を有し、その間かなりの変遷がある。近代の中国仏教は衰微の極に達し、殆んど取るに足らないが、隋・唐・宋を中心とした仏教界殊に隋・唐時代は、中国仏教の最盛期で、多数の高僧碩徳が輩出して、東洋文化史上一大盛観を呈している。かゝる時代には、近代中国精神とは異り、そこに何等か大なる東洋精神の躍動があったのであって、単

に仏教のみならず、あらゆる文化的側面において中国文化が最高潮に達した時代である。

仏教が最初中国に伝えられたのは、後漢の明帝の時といわれている。その時代には、当時の楚、今の除州辺まで仏教が伝わっていた。明帝の永平10年(67A.D.)に、迦葉摩騰と竺法蘭の二人が、印度から洛陽に来て、仏教典の翻訳をしたのが、仏教伝来の初めと言われているが、これは疑問とされている。その後桓帝(147—176)の時に、安世高と支婁迦讖の二人が、それぞれ安息国及び月氏国から洛陽に来て仏典の翻訳をした。前者は原始仏教、後者は大乘仏教の教を翻訳した。これが仏教伝来の初めである。中国仏教は、かくの如く初めから大乘教典を受取っている。

三国時代には、朱士行・支謙の二大翻訳者があり、次いで西晋・東晋時代には、西晋の竺法護(約230—308A.D.)が有名である。彼は36ヶ国語に通じ、維摩・無量壽・法華等の多数の経典を翻訳した。東晋時代の末期には、羅什・覺賢・曇無讖の三大翻訳者があらわれて、仏典翻訳時代の絶頂をなしている。羅什は「法華」「般若」、覺賢は「華嚴」、曇無讖は「涅槃」の翻訳で有名である。

又この時代には道安(312—385A.D.)・慧遠(334—417A.D.)の二大学者が現われ中国仏教学が創建された。後漢・三国・西晋・東晋の準備時代を経て、漸く仏教を学問として研究するようになった。儒教の方面では、後漢時代には校証訓詁の学が盛んであったが、三国時代以後には次第に老荘思想が勢を得た。従って、当時仏教は老荘的に解釈され、仏典は老荘的に翻訳された。即ち、涅槃を無為、菩提を道として翻訳された。しかし、本来仏教とは全く思想内容を異にする老荘の思想で、仏教を解釈したのでは、仏教の真面目は現われない。そこで道安は仏教は仏教自らの思想によって解釈すべきであるとして、彼は当時一般の風潮に反対して独自の解釈を企てた。この故に、中国仏教学は道安に始るとされる。

道安の弟子が廬山の慧遠である。彼は従来の仏教が単に学問として研究されるに止っていたものを、真に体験の仏教となした。慧遠は本当の戒、本当の定は廬山から始まっていると言われるまでに、戒律・禪定に力を用いた真の仏者である。しかし努むれば努むるほど人間の業というものゝ如何ともなし難きを痛感して、これが発展して念仏となった。慧遠の頃から次第に仏教が中国人の間に流布し完成に向った。道安・慧遠の二大高僧の出現後は南北朝の研究時代に入る。この時代に北狄の侵入があり、これ所謂五胡16国の乱である。この当時、多数の国に分れ相争ったが、後で北方は蒙古族の一たる鮮卑(拓跋氏)の出である後魏(440A.D.)に統一され、南方は漢民族である宋に統一され、北狄(胡民族)と漢民族は南北に対立し抗争することになった。南北朝の対立は、単に民族間の争いに止らず、それは同時に、外来文化対固有文化即ちインド文化対中国文化、仏教対道教の争いを意味した。

後漢時代の末期から中国に侵入した仏教は、次第に中国に信仰を弘めつゝあったが、秦・漢時代の高度の文化を経た中国文化は、単に外来文化に屈服することはできなかった。

偶々胡族が仏教の信奉者であったことから、両民族間の争いは一転して、仏教対道教の宗教上の抗争となった。中国において、宗教上の争いが深刻を極めた理由は、その背後に民族間の敵意・闘争意識があったからである。

仏教渡来と前後して、中国には道教が創建された。この創始者は後漢の張道陵といわれる。彼は中国古来の民族信仰である陰陽五行の説と、老荘の虚無思想とを結びつけ一種の通俗宗教を創始した。その教義は、魔術的方法によって神仙となり、不老・長生・富貴・栄達を理想とするので、一種のアニミズム（Animism）的宗教の段階を越えていない。これはいわゆる卑近な御利益宗教の段階に止っているものというべく、中国人の精神構造に高邁な理想を植えつけることを妨げ、一種の精神的阿片としての作用を及ぼしつつ、仏教と併行して、次第に中国人の間に流布された。

南北朝に入ると、道教の徒に寇謙文があり、仏教が次第に興隆に向いつゝあるのを見てこの排斥を企て、廃仏毀釈を唱道した。この企ては成功し、遂に魏の武帝の時に、帝王自ら廃仏毀釈を断行した。これが第1回目の廃仏毀釈運動で、420年頃のことである。当時、魏の領域は、黄河を中心として北方に位し、広大な地域を占めていたが、その全領域にわたって廃仏毀釈が行われた。しかしこの廃仏毀釈は十分に成功したとは、いえなかった。その後、間もなく武帝の孫、文成帝の時に仏教回復の詔勅が出て、大同の雲崗及び洛陽の龍門にそれぞれ大石仏を建設した。これらは岩壁に巨大な仏像を多数、大小併せて数百体彫刻したものである。世界文化史上の一大遺蹟として、永久に人類全体の共同財産である。

この石仏建設は、一面において如何に武帝の廃仏が峻烈であったかを証する。当時仏教が隆盛に向いつゝあった時代精神から見れば、かゝる廃仏は罪業深い感があった。文成帝の時に、祖父の武帝の廃仏に対して、懺悔・滅罪の精神並に父祖の追善・冥福を祈るという精神から、仏に供養するために石仏を建設したのである。このために仏教は復興の気運に向った。しかるに南北朝の末期、北周（557—588 A.D.）の武帝の時に第2回の廃仏が行われ、揚子江以北の仏教は殆んど絶滅するような打撃を与えられた。これを要するに、南北朝時代は仏教の研究時代であって、この時代の特色を一言にしていえば、廃仏を以て始り、廃仏に終ると言いうる。

南北朝における道教との生死の争を経て来た仏教は、はげしい苦難の道を経て来ただけに、隋・唐時代に入ると力強い発展を示し、中国仏教史上空前の盛況を呈した。これは仏教だけの問題ではなく、当時の中国文化全体は世界最高の地位にあったと称して差支えない。ヨーロッパでは未だカトリック文化が成熟せず、中国文化に比肩しうるものではなかったと考えられる。我国は文化の後進国として、遣隋使、遣唐使が多数中国に留学していた時代である。隋・唐時代の300年間に多数の高僧や碩徳が輩出し、中国仏教哲学は最高潮に達した。中国仏教哲学が完成したのは、唐の前半であって、それ以後は近世にいたるまで、それ以上の発展は見られない。唐の前半に隆盛の極に達した仏教も後半に入ると武帝（唐20代中15代目、841—846 A.D.）の廃仏（第3回目）を契機として次第に衰運に向っ

た。武帝の廃仏毀釈運動は、845年（A.D.）8月に行われた。全国にあった仏寺4万余を破壊し、僧尼合せて26万余人を還俗させることによって、仏教の徹底的な廃絶を企てた。

唐以後、五代・北宋・南宋を通じて、専ら中国に栄えた仏教は禅宗である。以上3回にわたる廃仏の結果、中国では經典が殆んど絶滅したために、文書をはなれて仏教の精神を實現しなければならなくなった。当時の經典は、遣唐使が我国に帰国するときに持って来たものが残っているだけである。中国では經典がなくなったために、文書をはなれて、自らの内なる心の世界を開いて仏教精神を鍊成する必要から、禅宗が勃興した。所謂、不立文字、教外別伝により仏教精神を伝えようとした。五代の末期、後周の世宗（954—959 A.D.）のとき、第4回目の廃仏が行われた。955年5月に無額寺院を廃し、私度僧尼を禁じた。また同年9月に仏像等を鑄潰して、通貨を鑄造した。これを以て廃仏の最後となった。これらの4回にわたる廃仏事件の結果、大蔵經彫印が行われた。

大蔵經の彫印というのは、岩窟に仏教經典の全体即ち一切經（大蔵經ともいう）を彫刻しようとするものである。国王を先達とする廃仏毀釈運動が全国にわたって行われるのを見た心ある仏教徒は、又廃仏があるに相違ない、その時には、經典が全滅するであろうと考えた。そこで經典を千載に残したいとの大理想からこのことは出発した。これは房山石經の発願者静琬法師の跋語によって明かである。河南響堂山の石窟に經が刻されている。鏡のように研いだ石に、維摩經・勝鬘經・彌勒經が立派な漢字で彫られている。その発願文に、一代經を名山に勒せんとあるから、一切經を刻せんとしたものである。北齊の大官唐邕の発願である。一切經を石に彫刻せんという発願及び実行は、北齊時代に始まり、やがて京兆の房山に継受されて、隋の時代から遼の時代まで五、六百年にわたって、大蔵經の半分以上が出来た。これは先の石仏と共に世界文化史上の大遺蹟の一である。山東の泰山には、金剛般若經が岩床に彫付けてある。これもまた北齊時代のものといわれる。一字は一尺四方以上の文字である。それが9百幾字遺っている。<sup>(10)</sup>

宗教に対する外部的な迫害それ自体が、必ずしも宗教衰滅の根本原因ではない。むしろその国民の宗教心の喪失或は高遠な理想への情熱の喪失がその根本原因である。このことは中国においてもまた言いうる。数度にわたる仏教に対する迫害それ自体が、必ずしも仏教衰滅の根本的原因ではなく、むしろ仏教に代って、道教が中国社会に支配的勢力を占めたことが、その根本的原因である。道教は先に一言したように、老子の神祕思想と中国古来の魔術的信仰（神仙思想・陰陽五行説・卜筮・醫術）とを結びつけた一種の魔術的なアニミズム的な宗教である。その目的とするところは、不老不死により神仙となり又現世での幸福・富貴を求めることである。それに達するために、鬼神を祭祀し、服食・鍊養・胎息等の魔術的手段を第一義とする。勿論、道教においても仏教から借りて来た輪廻思想・衆善奉行・諸惡莫作といった倫理的要請はあるが、その高度の魔術性の故に、その点については殆んど積極的影響を与え得なかったのである。かくて、道教はその本質において、禁欲的要求を全く欠いているものと言いうる。また迷信をその主なる内容とするものであ



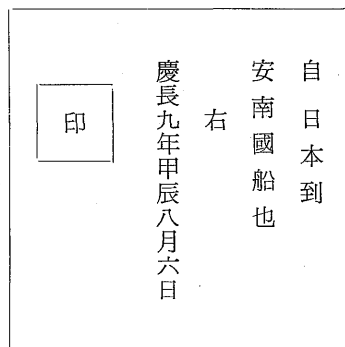
ったために、現世への倫理化・合理化は行われず、魔術性を残存させるようになる。中国社会が近代にいたるまで、高度の迷信に支配され、陰陽五行説をはじめ数々の夥しい迷信の世界に沈淪していることは、まことにおどろくべきものがあるが、それは専ら道教の影響に基くと考えられる。中国人に真に宗教心を与えたのは仏教であると言われているが、廃仏を契機として、仏教に代って道教が中国人の魂を支配するに容易な立場にあったために、道教が支配的となり、真実な宗教、高い理想に対する情熱を失わせ、延いて仏教を衰微せしめたのである。

これを要するに、仏教は後漢の明帝時代に中国に伝えられ、その後、次第に隆盛に赴き隋・唐時代にはその最盛期に達した。しかるに南北朝以来、道教対仏教の勢力争いは遂にその後500年にわたる廃仏毀釈運動となって発展した。そのために宋時代以後は、仏教は衰微の極に陥り、それに代って道教が支配的勢力を占めるようになった。中国文化史上、隋・唐時代(589—617, 618—906 A.D.)が最盛期であり、西洋においては未だカトリック文化が成熟せず、その当時それは世界に冠絶する文化であって、世界文化史への寄与は著しいものがあった。その時代はまた中国仏教の最高潮であったことを想えば、隋・唐文化の精神的基礎をなしたものが仏教であることは明かである。中国仏教精神の衰えと共に、中国文化も次第に頹廢に陥ったことは、真実なる宗教による高い理想への情熱の有無が、如何に一国の文化の盛衰に深刻な影響を与えるかということの一つの例と見られうるであろう。

#### 四 アンコール・ワットと日本人

アンコール・ワットの内在的研究に入るべき順序であるが、この問題は甚だ多くの内容をもっているので、別の機会に独立の問題として書くのを適当とする。こゝでは標記の問題を通じて、文化財に対する各国人の態度並に文化意識の問題を取上げてみたい。

インドシナと我国との関係は、遠く秀吉時代にまで遡ることができる。文禄元年(1592年)に秀吉が、海外貿易特許制度である「御朱印船」制度を創設し、京都、堺・長崎の富商8名を選んで、朱印状を授け、海外通商を特許した。しかしこの当時はまだこの制度は



完備の状態に達していなかった。その後、徳川家康時代になって、盛んに海外貿易を奨励し、朱印船の免許も3都8商に限らず、島津、鍋島、加藤清正、細川氏等の諸大名を始め、その他富商でも身許の確実なものにはこれを特許した。家康が慶長9年(1604年)8月に安南国へ渡海するために与えた朱印状は現存している。

(11) 慶長9年(1604年)から元和2年(1616年)にいた

る13年間に、徳川幕府が下付した朱印状の数は総計183通に達しているが、このうちイン

ドシナを目的としている御朱印船に対する交付数は83通、タイ向船には35通、フィリッピンには32通等であった。即ちインドシナ向の下付数は、その45%強を占めている。また元和元年（1615年）から寛永12年（1635年）にいたる21年間における渡航商船数は138隻あったが、そのうちインドシナへは79を算し、タイ17、フィリッピン13等で、インドシナが57%強を占めていた。かくの如く、当時我国の海外貿易中、インドシナが貿易の取引地として、如何に繁栄し、重要な市場であったかを知り得る。

当時、日本から先方に輸出していた商品は次の如きものであった。

交趾向のもの—銅、鉄、萬器物、薬罐、水風呂、帷子、扇子、傘等

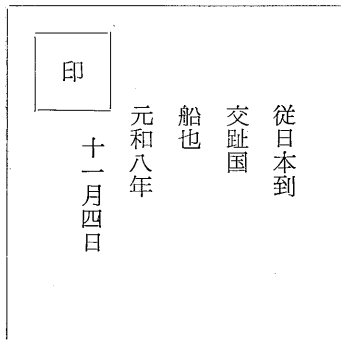
トンキン向のもの—銅、鉄、銭、椀、薬罐、扇子、水風呂、傘、鏡、萬器物等

カンボジャ向のもの—銅、鉄、碗器、樟脳、扇子、傘、薬罐、萬器物等

右のほか、刀剣類も輸出された。我国の刀剣は品質と装飾が優秀であるために、極めて珍重された。当時の輸出品である刀剣類其他は、サイゴンのブランシャール・ド・ラ・ブロッツ博物館に現在陳列されている。また銅の品質も優良で、殊に漆器はその当時から我国の輸出工業品中の傑作の一であった。

次に輸入品の主なるものは、香木、宝石、獣皮、象牙、縮緬、紗綾、緞子等で、主として我国支配階級の愛用品であった。

右の事情から、当時、多数の日本人が渡航し、従って、日本人町がインドシナの各地に



形成されたことは明かである。特に、長崎居住の御朱印船貿易商人荒木宗太郎は、元和8年（1622年）に安南に渡航し、安南国王の娘を妻とした。後、彼は妻と共に帰崎し長崎で没した。その妻が安南から携えて来た化粧鏡は、長崎県立図書館に所蔵されている。荒木宗太郎に与えられた朱印状と安南国王から彼に与えられた文書は、現存している。その朱印状は元和8年に下付されたものである。

当時、インドシナの日本人町は、現在のヴェトナムではフエ・フオ、ツー・ランにあった。カンボジャでは、ウドンとプノム・ペンの中間地帯、及びプノム・ペン郊外にあった。プノム・ペンの日本人町はその昔あった場所だけは知られているが、遺蹟は何も発掘されていない。カンボジャには橋の名を「日本橋」（pont japonais）と称される小さな石橋が現在残っている。在留邦人も一時はフエ・フオに二百四、五〇名、カンボジャには四、五百名に達したと言われている。しかし、邦人の海外発展も寛永16年（1622年）以来の鎖国により、次第に衰運をたどり、全く潰滅状態に陥った。

アンコール・ワットには、朱印船貿易時代に活躍した日本人の消息が残されているので次に記す。アンコール・ワットは、大部分石造建築であるが、廻廊には朱塗の石の柱や板戸がある。その奥殿に近いところの柱の一つに次のような落書がある。寛永9年（1615年）

寛永九年正月に初而此所來る生国日本

肥州之住人藤原朝臣森本右近太夫

一房御堂を志し千里の海上を渡り一念

之胸を念じ生々世々娑婆浮世之思を清る者也

為其に佛を四體立奉物也

攝州北西池田住人森本儀太夫

右之家一去裕道仙之為娑婆に

是を書く物也

尾州之国名里之郡後宝號

老母之尊靈明信大姉為後世に

是を書く物也

寛永九年正月廿日

即ち家光將軍時代に渡航した加藤清正の臣森本儀太夫の子で、肥前之住人森本右近太夫が書いた祈願文である。所々、消えかゝって読みにくい点はあるが、極めて達筆の細字で、矢立で御家流に12行にわたって書き下してある。筆者は昭和19年当時、アンコール・ワットで実際に見たのであるが、330年位前に書いたものとはいえ、墨痕麗しく書き残されて居り、大体において明瞭に判読できる。次の祈願文中にあるように、彼は仏体を四体奉納している。

森本右近太夫というのは、おそらく一かどの武士であつたのであろうが、文面に仏教信徒としての敬虔な思想があふれている。これは柱の南面にあるが、同じ柱の東側には、

の著名がある。この2人は当時の在留邦人か或は御朱印船貿易商人の人達であらう。

水戸市の博物館彰孝館は昔、水戸家の図書館であつたが、そこにアンコール・ワットの見取図がある。これは家光將軍時代に、長崎の通辞の島野兼了が、インドの祇園精舎を視察して来るべき命を將軍から受け、渡航したが、アンコール・ワットを祇園精舎と誤認して、参拝し、詳細な見取図を作製して持ち帰ったものである。当時のアンコール・ワットは、金、銀、朱で極彩色が施してあり、一大美観を呈していたので、海外の事情に暗かった時代に彼が間違えたのはやむをえなかつたであらう。

右と関連して、一つの注目すべき問題点がある。森本右近太夫の書がある廻廊の近くに戸板一枚位の大きさの朱塗の板戸がおいてあつた。その板戸の表面に、一字10センチ四方位の大ききで日本文字が麗々しく書いてある。「東京M物産本店」との表題の次に、10名位の姓名が同じ大きさの字で書いてある。昭和何年何月何日参拝記念と結んである。奥殿近く之最もよく参詣者の目につく場所である。その他、日本人の落書が非常に多い。何々中尉と軍刀で彫り込んだものもある。日本人のは、昭和15年仏印進駐後に書かれたものが、その殆んど全部を占めているように思われる。わずか数年の間に無数に落書してある。あまりに日本人が多いので、外国人のを注意してみた。フランス人のが万年筆で小さく姓名を書いたのが数名あつた。中国人はさすが詩文の国で、小さい墨字で漢詩を書いたのが二、三あつた。越南人も万年筆で小さく姓名を書いたのが二、三あつた。これらの諸国人のものは、大して目ざわりにならない。

日本人のは外国人が見たら、聖蹟を故意に汚辱していると誤解されやすい位に多い。そ

肥州 肥州孫左衛門  
木原屋嘉右衛門 由保

の最も著しいのが、初に書いたM物産社員のものである。我国一流商社の社員にして、かゝる状態である。こゝに中世日本人と現代日本人との道德意識の差が明かに出ている。森本右近太夫のは、敬虔な仏教徒の信仰告白に近い。交通不便な当時、はるばる千里の波濤を越えて、アンコール・ワットまで辿りつき、壮麗眼を奪うばかりの大伽藍を見て、感動のあまり、人目につかないようなところに小さく一筆落書しても、それは大してとがむべきことではないであろう。現代日本人のは不敬虔な、傲慢な落書である。これは単に習慣の差として簡単にかたづけ去るべき問題ではない。現代の日本には、国民のモーラル・バックボーンを支えるものとしての世界史的宗教を欠如している。中世日本には日本仏教が厳存し、生きてはたらいっていた。その欠如は、現代日本人から聖なるものに対する敬虔な精神を失わしめた。世界史的な文化財に対して、襟を正して向うという謙虚な気持を失わしめた。これは日本文化の将来に重大な問題を投げかけるものであろう。文部省が如何に多くの文化勲章を出し或は多数の文化功労者を表彰しても、国民精神の根本にかゝる欠陥があつては、大した効果をあげえないであろう。現状のまゝでは、我国の将来に世界文化史上に大なる貢献をなすような大なる文化創造を期待することは困難であろう。

(註) (1) Fletcher: History of Architecture. p. 417.

(2)       "               "               p. 408.

(3)       "               "               p. 394.

(4) Michelin: paris. p.56.

(5)       "       "       p.51.   ヌウェット著パリ, 41頁  
鈴木・小林訳

(6) Muirhead: London, p. 17.

(7) 梅本愛子訳, バガヴァード・ギータ

(8) 手島郁郎「生命の光」昭和30年5月号

(9) 宇井伯寿, 支那仏教史 1—102頁

(10) 常盤大定, 支那の仏教, 172頁

(11) 岩生成一, 朱印船貿易史の研究 (加藤清正については同書112頁参照)

(12) ジャン・モリス著 日仏印通商史, 25—26頁  
尾上貞五郎 訳

(13) 長崎市役所編, 幕府時代の長崎, 42頁

(14) 水谷乙吉, かんぼじあ史, アンコールの研究, 17—8頁

パルマンティエ著 アンコール遺跡群, 284頁  
永田逸郎 訳

(15) 水谷, 同上書, 10頁